

東アジア地域ガンカモ類重要生息地 ネットワーク・ワークショップに参加して

神谷 要

米子市米子水鳥公園、683-0855 米子市彦名新田665

クッチャロ湖について

クッチャロ湖は、北海道枝幸郡浜頓別町にある日本で三番目のラムサール条約登録湿地です。ここで、1999年10月24日ラムサール条約登録十周年記念事業と平行してガンカモネットワーク会議が開催されました。日本白鳥の会からは藤巻会長・松井名誉会長とともに登録湿地の関係者として山内昇・小西敢(クッチャロ湖)・神谷要(米子水鳥公園)も参加しました。

この様子を会員の皆様に御紹介いたします。

東アジア地域ガンカモ類重要生息地ネットワークについて

東アジア地域ガンカモ類重要生息地ネットワーク(以下ガンカモネットワーク)とは、東アジアの水鳥飛来地の保護と情報交換を目指したネットワークです。1999年5年14日、中米コスタリカのサンホセで開催されたラムサール条約登録会議において発足しています。その目標は、国際的に重要なガンカモ類の生息地を登録することによって、その生息地の重要性の認識、長期的な保全活動を支援しようということで設立されました。日本国内で14カ所、その他の東アジア地域で11箇所(ロシア・フィリピン・韓国・中国・モンゴル・アラスカ)が、ネットワークに参加しています。ハンカ湖(ロシア)・レナデルタ(ロシア)・三江自然保護区(中国)など日本へやってくるハクチョウの故郷や渡りルートになっている場所が含まれています。

繁殖地と越冬地で国際間をわたるハクチョウにとって、このような国際的なつながりには、その生息地を保全してゆくことはとても重要といえるでしょう。

ワークショップ

今回のワークショップでは、海外6カ国の参加湿地の現状と国内8カ所の参加湿地の現状と活動について報告がありました。各国・各地域の代表が真剣な面持ちで各地の状況について説明を聞いていました。特に印象的であったのは、各国の湿地保全に対する取り組みや問題点の違いでした。アメリカは、もっとも湿地保全に対する体制が進んでいますが私有地が多いためその継続性に疑問があり、ロシア

では湿地保全に取り組む人材不足、中国・韓国では開発の危機、フィリピンでは保全活動の社会的認知が進んでいないようでした。

これに対して日本各地ではNGO(非政府団体)が大きく活躍しており、ガンカモ類の生息地保全のために様々な活動を行っているのが印象的でした。時には行政までを動かして保護区の設定までこぎつけ例も報告されています。環境保全の仕事を行政に頼るだけでなく自分たちでかけがえのない湿地を保全していくという考え方が世界に広がっていくといいと思いました。

特にアメリカ以外の参加国の野生生物保護や環境保全にかかわる状況はまだまだこれからという印象です。一部の知識人がガンカモ類の生息する湿地の重要性について考え始めたばかりです。特に中国・韓国では、過去に日本でも問題になった干拓や農地開発によってガンカモ類の生息地が狭められているようでした。まだ工事は途中である為はその影響はまだまだはっきりしていませんが、工事が完成するにつれて湿地の多くが失われる事を心配しました。

今後、日本周辺の国々で多くの湿地の開発が行われれば、ハクチョウを含めたガンカモ類は本当に日本にやっこられるかとても心配になります。このような危機は以前からいわれておりますが、実際にその状況を聞くと何とかせねばという思いが募りました。また、日本においてもハクチョウが越冬地で利用する水田環境が、就農者の高齢化や都市化によって失われているのは同様な危機といえるかもしれません。

今後、このようなネットワークを更に強化して、いつまでも相互に水鳥たちが行き来できる環境を残しておきたいものです。

ガンカモ類重要生息地ネットワーク登録のための条件

1. ガンカモ類の種または個体群の1%以上が定期的に利用している。
(例：コハクチョウ 300羽・オオハクチョウ300羽)
2. 二万羽以上のガンカモ類が定期的に利用している場所
3. ガンカモ類で保護の優先度が高い種が定期的に利用している。

この条件は、ラムサール条約の登録要件の水鳥に関する条件とほぼ同じです。このような定期的に水鳥の個体数を調べることも湿地保全の一助となると私は考えられます。